

2 飯田五郎家義と館跡

現在の富士塚団地のある場所は、かつて飯田氏の館があったところといわれている。昭和三十七年の団地造成前までは、小高い山の脇に、壕の跡と思われる細長い窪地が残っていた。

平安末期に、この地を治めていた飯田五郎家義は、治承四年（一一八〇）、源頼朝が兵を挙げたとき、平氏側大庭景親らの兵とともに、石橋山の合戦に参加したが、多くの相模武士団の若武者と同様に、源氏の再興を望んでいたと思われる家義は、意を決し、頼朝軍の味方をした。また、合戦の際に頼朝が紛失した数珠を家義が拾って届けたところ、頼朝は大いに喜んだ。家義は随行を申し出たが、敗走に際して目立つといけないという土肥実平の進言から、涙ながらに別れたということが『吾妻鏡』などの史料に記録されている。

続く富士川の合戦では、源氏側として参戦し、長男太郎が敵に討たれたにもかかわらず、勇猛果敢なはたらきをして味方の勝利に貢献した。のちの論功行賞では、「前には石橋山で我が命を救い、今また戦功をなすは本朝無双の勇士なり」と賞賛され、飯田郷（上、下飯田と諸説によって

は和泉の一部も含む）の地頭職に任せられた。

『源平

盛衰記』

では飯田

三郎家能となっており、「東泉寺薬師堂縁起」には三郎家能に関する伝説も記述されているが、これらは家義と同人であるといわれている。家義の系図には諸説があり、大庭景親の配下であったとする説や、綾瀬の早川城に拠点を置いた渋谷氏の出身であるという説、また、家義の後継として渋谷庄司重国の五男重親（近）が飯田五郎を名乗ったという説など様々である。また、飯田五郎が甲斐国、駿河国の住人と記録されている文書もあり、それらの土地を領していたとの説もある。なお、『吾妻鏡』などの史料には、飯田氏の子孫の三郎能信や四郎浄宗が地頭職として関わった出来事がこと細かく記述されており、鎌倉時代のこの地と幕府のつながりの様子が伝えられている。

家義の墳墓は定かではないが、富士塚団地北西部にそれらしき跡があったともいわれており、付近の共同墓地内に



飯田五郎供養塔



平成7年頃の境川から見た富士塚

明治三十二年、「古賢大菩薩」の石塔が建てられた。また、東泉寺過去帳には「薬王院殿家興順能大居士」の戒名が記載され、供養を営んだ形跡が見られる。その後、昭和三十七年、団地造成に伴い、五輪塔などを東泉寺山門脇に移転し、家義の供養塔を建立した。また、館跡と思われる元の場所を西に下った鎌倉道沿いに「富士塚城址碑」を建て、現在の城址公園とした。このすぐ横を、市営地下鉄線と相模鉄道線が通ることとなり、この地もまた一歩、変容の時期を迎えている。

3 薬師堂と飯田三郎伝説

東泉寺境内にある薬師堂は、鎌倉時代の当地の地頭職飯田五郎家義が、字本郷の通称「薬師藪」(下飯田町一三七一番地)と呼ばれる所に建立したことに由来する。山田豊次郎著『中和田史話草案』によれば、飯田家義は鎌倉二階堂にあった永福寺薬師堂の薬師如来を信仰しており、社寺のなかった飯田の地に、この薬師如来を勧請して薬師堂を建立したとされている。

永福寺は、源頼朝が中尊寺の大長寿院をまねて建久三年(一一九二)に建立したもので、二階建ての本堂、阿弥陀堂、薬師堂から成っていた。「二階堂」という地名もこの本堂に由来する。「関東裁許状」には、永福寺薬師堂の僧



薬師如来像

と飯田郷地頭飯田四郎の孫娘婿との年貢についての訴訟が記録されている。

この薬師堂にまつわる伝説は『東泉寺薬師堂縁起』として、東泉寺と小菅家と天笠家に同様のものが伝わっている。

この縁起によれば、この薬師堂の薬師如来像は、空海上人が彫刻したと伝えられ、その功德は眼病その他の病に効き、十種の福をもたらすともいわれている。飯田三郎家能はこの霊像を崇拜し、守り本尊と仰いでいた。家能が出陣している時は、この如来像が夜光を放ち、家能の武運を守るといふ奇怪で不思議な現象がたびたび起こり、村人を驚嘆させたということである。

この薬師堂は寛助兵衛為春によって天正十八年（一五九〇）ごろ、東泉寺境内に移転された以降も、眼病、安産、育児、その他のご利益を願う人々で賑わった。

明治三十年（一八九七）に、盗賊がこの薬師如来像を盗み出したが、仏罰をおそれ藤沢山の谷に捨てて行ってしまった。数日後、夜遅く、近くを通った村人が、草むらから異様に光るものを発見して調べてみると、飯田の薬師様であることがわかり、無事に戻ったと伝えられている。

なお、現在の薬師堂は昭和五十三年に再建されたもので、中央に、この薬師如来像、右に十一面観世音菩薩像、左に札所となっている弘法大師石像が祀られている。



東泉寺と薬師堂（左）